

伊藤義教先生と『西南アジア研究』の編集

会 長 小 野 山 節

十余年に渡って本誌の編集に尽力され、現在の会誌の原型を創られた伊藤義教先生が、1996年10月23日イラン学・言語学に多大の業績を残して87歳の生涯を終えられた。

そのおよそ一年前に立教大学池袋キャンパスで行われた日本オリエント学会第37回大会では、「ルリスタン出土の一青銅剣銘をめぐって」のご研究を、B 4 版資料 3 枚によりながら発表された。資料 3 枚は、絶えず新しい課題を見付け出し、修得した数多くの古代および中世言語を駆使してその内容を解き明してゆく先生の研究姿勢と方法を如実に示すもので、問題とする銘文の楔形文字と銅剣の写真 2 葉は当然のことながら、ヨーロッパの研究者や地名とともに、話の進展にそう順で、古代ペルシア語、アラム語、古代メディア・ペルシア語、中世ペルシア語、アラム・イラン混成語、エラム語、アッカド語、ヒブル語、古代イラン語の音訳表記が、B 4 版紙面の端から端まで殆んど余白を残さないように記されていた。

この大会で先生の直前に発表する機会が与えられて、私は最後になってしまった先生のご発表を同じ部屋で拝聴することができた。先生は健康を害なわれていると伺っており、この大会には娘さんの恭仁子さんを伴って居られたので、気掛りながら為すすべて格別に思い付かないまま、発表に耳を傾けた。そのご様子は以前とあまり異なるところもなく、お元気そうに感じられたことであったが、本誌第46号(1997年3月)に掲載された上岡弘二氏の「伊藤義教先生のご逝去を悼む」によると、発表内容を印刷する段階では上岡氏が校正を行ったという(『オリエント』第39巻第1号所収、1996年9月)。伊藤先生ならではの新しいご研究をもはや聴けなくなって、まことに残念である。

伊藤先生のご業績については、上岡氏が作成された著作目録ならびに上記の追悼文、あるいは井本英一氏によっていただきたい(『オリエント』第39巻第2号、1997年および『以文』第40号、1997年)。私には先生のご業績について批評めいたことを述べる資格も能力もないが、かつて本会の会計事務を担当していた関係で、分野は異なるけれどもこの碩学から研究を目指す者にとって大切なことは何かを教えられた。二つの場面を記録にとどめて先生への追悼とし、感謝の意を表したい。

伊藤先生は先に列挙したような多数の古代中世言語に通じておられ、それらを縦横に使って碑文や文書を正確に読み解くことを無上の喜びとされていた。古い文献を正確に読むことが、それらの文献を残した民族や宗教を理解する上の最も重要な前提であることは、改めていうまでもなからう。いずれも岩波書店から刊行された先生の著書『古代ペルシア』(1974)および『ゾロアスター研究』(1979)も、この種の研究書の通例にしたがって二部からなり、第1部が

碑文ないし文書の訳出にあてられ、第2部において、文字を論じあるいは言語学上のさまざまな問題の検討を含めて文学的、宗教的、社会的、さらに歴史的な側面に迫るという構成をとっている。しかし先生の場合その比重は、どちらかといえば原文を正しく解説することにあつたように感じられる。

「特に先生の本領とされたのは、パフラヴィー語テキストの文献学的研究であつた。その訳出には絶対の自信をお持ちであつた」と高弟の上岡氏は上記の追悼文で述べている。続けて「事実、先生の読みの深さと直感力には凡人のとても及ばないものがあつた。……当時の樋口助教授を通して、中国より依頼のあつた西安市出土のパフラヴィー語墓誌をすぐさま解説して、日本のイラン学の水準を世界にお示しになった」と、上岡氏は称える。この墓誌の解説過程において、伊藤先生が一応の解説を終えたときのご様子は、確かに十分な自信があつてこそと強く印象づけられるものであつた。

先生がそのテキストの解説を試みるに至った顛末と解説の成果は、『西南アジア研究』第13号「足利惇氏教授退官記念オリエント研究特集」(1964)に、「西安出土漢蕃合璧墓誌蕃文解説記」と題して発表され、その中国語訳が「西安出土漢、婆合璧墓誌婆文語言的試釈」との表題で1964年第2期の『考古学報』に掲載された。当時、中国科学院考古研究所の所長であつた夏鼐博士から問題の墓誌銘解説の依頼を受けて、樋口先生が伊藤義教先生に墓誌の写真を渡されたのが1964年6月3日、「翌6月4日には一応の解説を終え」て、その内容を伝えるために陳列館の樋口研究室へ来られた。伊藤先生が考古学研究室へ立寄られたのはその帰りであつて、解説を手掛けるに至った経緯に触れながらこの墓誌銘の内容を解説して下さった。そして、わずか1日で行つたこの解説は、

「簡単でしたワ」

と。伊藤先生の解説が刺激となり、中国において発見されたパフラヴィー語碑文の研究が、欧米諸国でも中国でも行われるようになったとのことである。中国人研究者による研究成果の一つが、劉迎勝氏による「唐蘇諒妻馬氏漢、巴列維文墓誌再研究」として四半世紀のちの『考古学報』(1990年第3期)に発表されている。

本誌の編集に伊藤先生が参画されたのは第5号(1960年)から第22号(1971年)までである。創刊号(1957年)から第5号(1960年)までが和文タイプ印刷による30~40ページの薄いものであつたのに対して、第6号からは活版印刷60余ページで、論文のほかに書評や学界展望あるいは海外消息をも積極的に盛込んでいく方針をとっている。また学会誌としては珍しく扉をつけ、扉の上部に雑誌名と号数、下部に研究会名を入れ、中央にクレッシェントとサザン・クロスをモチーフとした会章を配置して、その裏に目次を印刷してある。このかたちができた経緯は、先生が本誌第14号の「あとがき」に記してある。

新装の第6号で先生は4箇所に執筆しておられる。専門的な論文とは別に「チェコスロバキアのオリエント学——その伝統と近況——」の学界動向と彙報欄および「あとがき」である。この学界動向は、予定していた原稿がはいらなかったために、原稿枚数をそれに合せて急拠お

書きになられたものであろう。第7号以降でも時々このような場合を活用して、短い論文や若い研究者にとって有益と思われる情報を積極的に提供しておられる。彙報欄は昭和36年度の京都大学文学部西アジア南アジア史学講義題目と会員消息である。当時は会員も少く殆んど京都大学の関係者であったから、情報収集も比較的簡単であったと思われるが、その後の会員拡大方針によって先生と全く接点のない研究者が増加したにも拘らず、新会員の著作は勿論のこと、新会員が関係する西アジア南アジア関係の学会活動も丹念に採録されて、紙面の許す限り掲載された。

かなり面倒なこのような作業を、先生は殆んどお一人で熟しておられたようにお見受けした。先生のご指示に従って印刷所に代金を支払うのが私の役目であった。先生からの連絡事項は、研究室への行き帰りに文学部陳列館にあった考古学研究室に立寄って直かに伝えられた。私が不在のときはメモがことづけられており、そのメモは広告紙の裏に記されていた。

寄せられた原稿は分り易いように良く整理しておられた。伊藤先生ならではの、と私が最も感動したのは、良く知られているOさんの原稿の取扱いについてである。Oさんの字は決して悪筆ではないと思うが、読みにくい文字の多い原稿であることも事実である。Oさんの漢字が読みにくいのは、画をかなり省き全体として字を小さく書いたことに原因があると私は判断したが、Oさんの文章をいっそう読み辛いものになっているのは、漢字を書くとき使った画を省き一画の長さを縮小するという書き方を平仮名にも適用したためと思われる。頭の早い回転に併せて文章を書こうとしたことに因るのではないだろうか。

伊藤先生は先ずOさんの原稿を清書し直すことを試みられた。ところが識別しにくい平仮名が多いため、清書の作業を中断して五十音図の平仮名対照表を作成し、いくつかの漢字の対照表を加え、それを手引きにして清書のやり直しを全文にわたって断行された。この対照表を考古学研究室に持って来られて、その経緯を説明して下さった。そして、先生は幾分はにかみを込めたように苦笑しながら、最後に

「日本語の解説ですワ」

と結ばれた。本当に頭の下がる思いであった。この時に見た対照表も、新聞に折込まれる広告の裏に書いてあった。

原稿の仕上げ方と印刷の方法が大きく転換した現在では、このような状況は想像しにくいことかも知れないが、伊藤先生が『西南アジア研究』の編集に払われた精進は並々ならぬものであり、しかもその進め方は先生の研究方法と深く係わっていた。伊藤先生から多くを学び、テキストを正確に読み、あるいは資料を精細に観察して、十分に自覚をもって大胆に展開された仮説を含む優れた論考が本誌に寄せられることを期待している。